

# オンライン日本語教師研修の成果と課題

## —スペイン・ポルトガルの日本語母語話者教師を対象とする 同期型オンライン研修の実践—

篠崎摂子

### 1. はじめに

国際交流基金マドリード日本文化センター（以下、JFMD）では2010年4月の設立以来、スペイン、ポルトガルの日本語教師を対象とする教師研修を実施してきたが、2017年にオンラインによる教師研修（以下、オンライン研修）が本格的に導入された。本稿では、2019年4月～2020年2月にJFMDで実施した同期型オンライン研修（全32回）の実践を報告し、参加者への事後アンケートとフォローアップ・インタビューの結果をもとに成果と課題を明らかにする。また、従来の参加者を会場に集めて対面で実施する研修（以下、対面研修）との比較も行ってみたい。

### 2. 背景

#### 2.1 JFMDの教師研修

JFMDでは、主にスペインとポルトガルの日本語教師ネットワークとの協力で教師研修を実施している。スペインでは毎年、スペイン日本語教師会（以下、APJE）との共催による総会兼研修会、助成による年2回の定例研修会が首都マドリードで開催される他、JFMDの日本語教育アドバイザー（派遣専門家）が各地に出張する巡回セミナーが年10回程度実施されてきた。巡回セミナーは、マドリードの研修会に参加しにくい地方在住の日本語教師に研修の機会を提供し、地域の教師ネットワークを構築すると同時に、JFMDが各地の日本語教育事情を把握することを目的としている。そしてポルトガルでも、ポルトガル日本語教師連絡会議（2019年10月より日本語教師会）の協力で年2回、リスボン、ポルト等で巡回セミナーを実施してきた。

巡回セミナーは参加者の評価も高く、上述の目的達成の点でもこれまで円滑かつ効果的に実施されてきている。筆者がJFMDに赴任した2018年度にもスペイン8か所、ポルトガル2か所の計10回のセミナーを実施した。巡回セミナー実施の際は、教師会の会員等が現地のとりまとめ役を務め、参加者集めや会場手配、研修テーマ選定等の協力を行っているが、JFMD側の調整や経費の負担も小さくない。また、巡回セミナーは各地域年1回の開催にとどまるが、希望する研修テーマが重なることがあり、地域や開催時期によって参加者数に偏りもある。JFMDの体制や事業予算は限られており、今後に向けて業務の効率化や費用対効果を考慮した見直しを

行う必要性が感じられた。そこで、2019年度は巡回セミナーの開催回数を減らし、一部をオンライン研修で代替してみることにした。

## 2.2 オンライン研修

国際交流基金（以下、JF）の海外拠点が実施するオンライン研修の先行事例は少なくない。村上（2013）はカイロ日本文化センターでのビデオ会議システムとライブ動画配信を利用した広域オンライン研修、竹村（2013、2014）はニューデリー日本文化センターでの Moodle を利用したブレンディッドラーニングによるオンライン研修、近藤他（2019）はパリ日本文化会館での Zoom を使用したハイブリッド型のオンライン研修について報告している。また、岡本・杉島（2020）はインドネシアでの Zoom を使用した非母語話者教師のためのオンライン会話会について報告しており、世界各地の拠点で現地のニーズや研修の目的に鑑み、オンラインの特性を生かした試みが行われている。

JFMD では2017年4月に、筆者の前任者によって Zoom を使用したオンライン研修が導入された。目的は「スペイン、ポルトガルの日本語教師にネットワーク形成と学びの機会を提供するため」で、形式は「情報・知識伝達を目的とした講義型」と、「情報共有・ネットワーク形成を目的とした参加型」の2種類があり、方法は事前申し込みをした参加者が所定の日時に Zoom に接続する「同期型」であった。この研修（以下、2017年研修）は同年6月までに計13回実施され、参加者数はのべ141名、1回の平均は10.8名だった<sup>(1)</sup>。

筆者は前任者の帰任後、半年以上の空白期間を経て2018年4月に JFMD に赴任した。そして、2019年2月の APJE 総会でオンライン研修の内容や日時（時間帯）に関する希望調査を行い、4回のパイロット研修を経て、4月から本格的にオンライン研修を再開した。

## 3. 概要

以下、筆者が実施したオンライン研修の概要を述べる。

### 3.1 対象・目的・内容

対象は、一義的には JFMD が支援対象とするスペインとポルトガルの日本語教師であるが、他の地域からの参加も妨げないことにした。また、両国を含めた西欧諸国の日本語教師の7割以上が日本語母語話者であり、教師会や巡回セミナーの参加者も母語話者教師が多数を占めていることから、オンライン研修の参加者も同様に想定した。

目的は、基本的に2017年研修を踏襲し、内容に関して以下を追加した。

- (1) 日本語教育・教授法の最新情報を提供し、教授技術および意識の向上を図る。
- (2) JF の日本語事業への理解を深めてもらい、成果物の利用促進を図る。

内容は、主に筆者がこれまで巡回セミナー等の対面研修で取り上げてきたものを、オンライン研修用に再構成することにした。具体的には、①JF 日本語教育スタンダード、日本語教材『まるごと 日本のことばと文化』（三修社、以下『まるごと』）シリーズ、日本語能力試験等に関するものと、②国際交流基金日本語教授法シリーズ（ひつじ書房、以下「教授法シリーズ」）を利用した分野別教授法とし、希望調査の結果を参考に優先順位を決めることにした。全32回の研修内容は後出の表4の通りである。

### 3.2 方法・形式・実施の流れ

方法は2017年研修と同様に Zoom を使用する同期型とし、形式はすべて筆者が講師を務める「情報・知識伝達を目的とした講義型」とした。希望調査とパイロット研修の結果を参考に、月に2～4回（1～2テーマ）、1回90分、定員15名とし、なるべく多くの教師が参加できるように、同内容のものを日時を変えて2回ずつ（木曜午後と金曜午前）実施することにした。希望調査では平日夜や週末の開催を望む声もあったが、インターネット回線が安定している JFMD の教室からの配信としたため、教室が使えない時間帯には開催しなかった。配信は筆者一人で行い、講師を務めながら機器操作や参加者への対応も行った。実施の流れは表1の通りである。

表1 実施の流れ

時期	内容
学期初め	全体の大まかな予定を提示
1か月前	日時とテーマを決定して告知 メールによる参加申し込み受付（先着順） →参加決定のメール連絡
1週間前	資料準備と Zoom 会議室情報のメール連絡
前日	リマインド・メール送付
当日	オンライン研修実施。終了後、参加者に事後アンケート回答依頼のメール連絡、講義スライドの PDF を配付

全体の大まかな内容と予定は学期初めの4月と9月にまとめて提示したが、具体的な日時とテーマは他の業務と調整して1か月前に決定し、月ごとに参加者募集を行った。募集は主にスペインとポルトガルの教師会等を通じて行い、9月からは JFMD の Web サイトでも告知を行った。個人情報を含む参加申し込みや Zoom 会議室情報等の連絡はメールで行い、無記名の事後アンケートは Google フォームを利用してオンラインで実施した。

資料準備は、主に JF の Web サイトに掲載されているものを事前にダウンロードしておいてもらい、講師が準備したものは PDF にしてメール添付で送付した。教授法シリーズ等、JF 制作の出版物の一部をそのまま使用する際は、関係部署に事前に承認を得た。研修で使用したスライドは終了後に PDF で配付したが、当初は事後アンケート回答依頼のメールに添付送付し、9月からは事後アンケート回答後に Google ドライブからダウンロードできるようにした。

### 3.3 毎回の進め方

前述の通り1回の時間は90分で、形式は基本的に「情報・知識伝達を目的とした講義型」とし、一部に Zoom のブレイクアウト機能を利用したグループ活動（1グループ3名程度）を取り入れた。講義が2～3パートで計60分、グループ活動は1回10～15分が2～3回で計30分を目安とした。表2は、第29・30回の⑮「教授法シリーズ（7）読むことを教える」を例に毎回の進め方をまとめたものである。

表2 毎回の進め方の例

時間	段階	主な内容
5分	導入	出欠確認、内容紹介
10分	グループ活動①	読解授業を振り返る
40分	講義①	I. 読解に関する基礎知識 II. 読みの授業を考える（前半）
15分	グループ活動②	読解本作業のタスクを考える
20分	講義②・まとめ	II. 読みの授業を考える（後半） 全体のまとめ

グループ活動①では、講義を始める前に参加者同士でこれまでの読解授業の経験を振り返るディスカッションをしてもらった。講師は各グループに入って少しずつ「盗み聞き」をするが、全体での共有は特に行わなかった。この活動は全てのテーマで行ったが、目的は当日のテーマに対する参加者の動機づけとスキーマの活性化で、講師も「盗み聞き」により参加者の問題意識を事前に把握し、講義で適宜取り上げるようにした。また、講義型の研修であっても毎回参加者同士が知り合い、発言する機会を設定することを心がけた。

講義①では、『教授法シリーズ7 読むことを教える』（国際交流基金 2015）の内容から読解モデルやスキーマ、読解ストラテジー、そして読解授業の前作業・本作業・後作業等を取り上げ、実例として『まるごと』初級～中級の読解パートのタスクを紹介した。講義は Zoom の画面共有機能でスライドを提示しながら講師が一方向的に話を進め、質疑応答はほとんど行わなかった。他のテーマでも進め方は基本的に同じで、元になるテキスト等の情報を取捨選択、整理してわかりやすく伝えることを心がけた。

グループ活動②では、中級の読解の本作業を考えるタスク（国際交流基金 2015、37-40）をグループで実際に考えてもらい、講義②で解説した後に、辞書の使用や新出語の扱いの考え方等を補足して、全体のまとめをした。グループ活動②の内容はテーマによって異なるが、参加者同士と一緒にタスクに取り組んだり、講義内容に関して論点を決めたディスカッションを行う等の活動を盛り込むようにした。それにより参加者が講義を聞くだけでなく、講義の内容を各自が文脈化し、参加者同士で協働する経験を持てるように心がけた。

参加者は多忙な日常の合間にオンライン研修に参加しているので、各テーマは1回で完結し、

毎回延長はせずに時間内で終了するようにした。そのため、時間内にグループ活動の共有や質疑応答、参加者同士の意見交換の時間を持つことは難しかったが、参加者からの希望もあり、途中から研修終了後に30分程度の雑談の時間を設定することにした。毎回5名程度の参加があり、当日のテーマに関わらず、講師を交えて参加者同士で自由に話をする時間とした。

#### 4. 実績

オンライン研修の全体の開催実績は表3、各回の開催実績は表4の通りである。

表3 開催実績 (全体)

実施期間	2019年4月～2020年2月	
実施回数 (テーマ数：内訳)	32回 (16テーマ：教授法シリーズ11、その他5)	
のべ参加者数 (各回平均参加者数)	311名 (9.7名/回)	
実参加者数 (国別内訳)	59名 (スペイン46、ポルトガル7、その他6)	
(実参加者数の内訳)	全16テーマ参加 (国別内訳)	3名 (スペイン 2、ポルトガル1)
	8～15テーマ参加 (国別内訳)	14名 (スペイン11、ポルトガル3)
	2～7テーマ参加 (国別内訳)	22名 (スペイン17、ポルトガル3、その他2)
	1テーマのみ参加 (国別内訳)	20名 (スペイン16、その他4)
肯定的評価 (全体平均)	98%	

実施期間は当初2020年3月までの全17テーマ (全34回) を予定していたが、新型コロナウイルスの影響で筆者が任期を短縮して帰国したため、最終テーマ (33・34回) は中止した。各回のテーマは表4の通りで、夏休みを挟んだ前半は希望が多かった漢字の教え方、日本語能力試験、『まるごと』を取り上げ、後半は教授法シリーズを一通り取り上げることにした<sup>(2)</sup>。

参加者数と内訳は表3の通りで、実参加者数59名のうち日本語非母語話者教師は3名のみ (うち2名は複数回参加)、国別内訳の「その他」はドイツ3名、日本2名、ロシア1名 (5回参加) で、想定通り大多数はスペインとポルトガルの日本語母語話者教師であった。半分の8テーマ以上に参加した教師は17名、1テーマのみの参加は20名で、繰り返し参加した教師 (リピーター) と、1回のみの参加に留まった教師が同じぐらいいた。スペインの参加者のうちマドリード在住の教師は22名、半分以上参加は2名で、地方在住の教師が熱心に参加していた。日時別の参加者数は木曜午後が平均8名、金曜午前が平均11名で、金曜を希望する教師が多く、申し込みが定員を上回って参加を断ることもあった。

表3および表4の「肯定的評価」は、後述の事後アンケートで「とてもよかった」または「よかった」と答えた回答者の割合を示す。なお、初回の参加者より「内容が基礎的すぎる」「参加者同士の情報共有の時間がない」という否定的なフィードバックがあったため、次のテーマの開催案内から「本セミナーは初心者向けの内容で、グループ・ディスカッションと講師の解説で進めます」という注記を入れるようにした。

表4 開催実績（各回）

回	時期	テーマ	木曜午後		金曜午前	
			参加	肯定的評価	参加	肯定的評価
1・2	4月	①漢字100字までの教え方	12名	82%	13名	100%
3・4	5月	②初級日本語と日本語能力試験 N4	7名	100%	15名	92%
5・6	5月	③『まるごと』を例にした初級の教え方	6名	100%	14名	100%
7・8	6月	④『まるごと』中級を例にした会話の教え方	11名	100%	9名	100%
9・10	7月	⑤『まるごと』中級を例にした読解の教え方	10名	100%	7名	100%
11・12	9月	⑥教授法シリーズ(1)日本語教師の役割/コースデザイン	13名	100%	9名	100%
13・14	9月	⑦教授法シリーズ(12) 学習を評価する	9名	100%	11名	100%
15・16	10月	⑧教授法シリーズ (2) 音声を教える	8名	100%	14名	100%
17・18	10月	⑨教授法シリーズ (3) 文字・語彙を教える	8名	100%	13名	100%
19・20	11月	⑩教授法シリーズ (9) 初級を教える	7名	100%	9名	100%
21・22	11月	⑪教授法シリーズ(10) 中上級を教える	8名	100%	10名	100%
23・24	12月	⑫教授法シリーズ (4) 文法を教える	6名	100%	13名	100%
25・26	1月	⑬教授法シリーズ (5) 聞くことを教える	7名	86%	12名	100%
27・28	1月	⑭教授法シリーズ (6) 話すことを教える	8名	100%	8名	88%
29・30	2月	⑮教授法シリーズ (7) 読むことを教える	6名	100%	12名	100%
31・32	2月	⑯教授法シリーズ (8) 書くことを教える	5名	100%	11名	100%

## 5. 評価

### 5.1 資料

#### 5.1.1 事後アンケート

本研修では前述の通り、毎回無記名の事後アンケートをオンラインで実施した。質問項目は以下の通りで、質問 (1) のみが必須の回答である。

- (1) 今日のセミナーはどうでしたか。（「とてもよかった～よくなかった」の5段階評価）
- (2) 3つのキーワード（セミナーで印象に残ったことばを3つ書く）
- (3) 本日のセミナーについてのご意見、ご感想等を自由にお書きください。
- (4) 今後のセミナー開催についてのご希望等があれば自由にお書きください。

調査対象は参加者全員（311名）で、回答数は283件（回答率91%）だった。本報告では質問 (3) の回答を分析するが、講師への謝辞等のみの記述を除いた有効回答数は243件だった。

#### 5.1.2 フォローアップ・インタビュー

事後アンケートの補足として、参加者の一部にフォローアップ・インタビューを実施した。対象は本研修に80%（13回）以上参加した教師6名で、2020年7月に1人60分程度のオンライン・インタビューを行った。内訳はスペイン4名、ポルトガル2名で、教授歴は3～28年（平均15年）、全員が日本語母語話者教師で筆者が講師を務めた対面研修の参加経験があった。

協力者にはオンラインの事前アンケートに回答してもらったが、内容は (1) 印象に残ったテーマ3つとその理由、(2) オンライン研修受講の理由、(3) よかった点と改善が必要な点、(4) 他のオンライン研修との比較、(5) 対面研修との比較の5項目である。インタビューでは事前アンケートの回答の確認・補足を行ったうえで、主に「教授法シリーズ」を扱った研修について①時間と内容量、②研修の流れ、③グループ活動、④講師とのやりとり、⑤同じ内容を対面の研修で扱う場合との比較、⑥オンデマンド（非同期）型の研修についてのコメントを収集した。

## 5.2 成果と課題

### 5.2.1 成果

表3、4の通り、本研修の全体的な評価は非常に高かったが、その理由を事後アンケート質問(3)の回答から見てみると、言及が多い順に①研修の内容、②他の教師との交流、③その他に分類できる。

①研修の内容については、「教授法の新しい知識やアイデア、情報を得た」と「教授法の知識が整理された、自分の教育実践に理論的な根拠を得た」の2つの傾向が大きく見られた。後者はある程度の教授経験を持つ参加者の回答と考えられるが、インタビュー協力者からも同様のコメントが出ていた。また、各テーマについて「自分の今のニーズに合っていた」というコメントがアンケートとインタビューの両方で多く見られ、本研修では初心者向けの内容を扱ったが、参加者はそれぞれのニーズや教授経験を踏まえて必要な知識や情報を得ようとしていたことがうかがえる。

②他の教師との交流については、毎回のグループ活動によって「情報や意見の交換ができた」「共感することができた」という趣旨のコメントが多く見られた。グループ活動の結果が共有されないことへの不満もあったが、それ以上に他の教師、特に初めて会う教師や遠方の教師との交流の機会として高く評価されていた。実際に筆者がグループ活動を「盗み聞き」した際も、参加者同士で熱心に話している様子が見られ、ブレイクアウトの時間を延長することが少なくなかった。「講義型」の研修であっても、グループ活動によって参加者同士の交流が可能になり、満足度が高くなることが確認できた。

③その他としては、「全体の雰囲気」「Zoomの使い方」への言及が目立った。オンライン研修の参加が初めてだったり、過去の経験から不安を持っていた人もいたようだが、本研修の雰囲気は参加者にとって馴染みやすいものだったようだ。また、Zoomの操作に慣れていなかった参加者は、本研修への参加を通して自信を得たとコメントしている。インタビューでは、新型コロナウイルスの影響で急にオンライン授業を始めることになったが、本研修の参加経験が役に立ったというコメントも複数あった。

鈴木・近藤（2017）は APJE 会員に対して教師会の活動意義を探る調査を実施し、教師会入会の動機が「情報交換の場として交流をもちたいという『つながり』」と「教師としてのブラッシュアップの場として『自己研鑽』」にあることを指摘している。本研修はまさに「自己研鑽」と「つながり」の場としての機能を果たしており、それが全体としての高い評価につながったと考えられる。

### 5.2.2 課題

成果と同様に、①研修の内容、②他の教師との交流、③その他の3点について述べる。

①研修の内容については、「内容が多すぎて消化不良だった」というコメントも見られたが、「さらに発展した内容を学びたい」という意欲的なものが圧倒的に多かった。インタビューでは全員が「時間と内容量は適切だった」と述べていたが、経験の浅い教師にとっては負担だったのかもしれない。今回の内容はおもに筆者が以前対面研修で扱ったものを再構成したものが、同じ内容でもオンラインの方が説明や確認に時間がかかるという講師側の実感もあったので、内容量については今後再考したい。

②他の教師との交流については、「グループ活動やアイデアの共有の時間がもっとほしい」という意見が多かった一方で、「グループ活動の時間は無駄だった」というコメントも少数あった。グループ活動は主に講義内容の理解を深める目的で設定していたが、グループによっては参加者同士の情報交換に終始することもあり、意図が十分に伝わらなかったところがあった。また、グループ活動の結果の共有はオンライン上の他のツールを利用すれば短時間で可能というコメントも複数あったので、グループ活動の方法についてはさらに検討したい。

③その他としては、Zoom の操作やインターネット接続等のオンラインの問題に関するコメントがあった。今回は筆者が一人で配信したため、研修が始まるとこれらの問題に対応することが難しく、接続の不具合のために途中で退席してしまう参加者もいた。Zoom の使い方については、参加決定のメールで簡単に説明し、参考になる Web サイトを紹介したうえで、自信がない場合は当日10分前に接続して試すように案内していたが、筆者自身も経験不足で突発的な問題には対応しきれなかった。大がかりなオンライン研修の場合は講師の他に機器操作や参加者のサポートを行うホスト担当者を配置することが望ましいが、今回のような小規模で連続開催する研修の場合は講師を含めた参加者同士で解決するしかないだろう。

最後に本研修を発展させる方法だが、インタビュー協力者からは、一つのテーマを2回連続とし、1回目は今回と同じ内容で、2回目はアイデア交換にするという提案があった。その場合、テーマについての基礎知識がある人は2回目だけの参加も可能になる。また2回目は次の学期の開催として、研修で学んだ教授法を参加者がそれぞれ実践してから結果を共有するという案も出された。筆者からは、講義の部分をオンデマンド（非同期型）にして、参加者はそれを

自習してからグループ活動中心の同期型の研修に参加する案について尋ねたが、「望ましい」と「参加のハードルが高くなる」という意見に分かれた。オンラインを利用した研修には様々な可能性があり、今後も参加者のニーズや研修の目的に合わせた設計が必要だろう。

## 6. 対面研修との比較

最後に対面研修との比較を行ってみたい。ここでは、表2と同様に読解の教え方をテーマとした巡回セミナーと比較する。

### 6.1 研修内容

表5は、2019年11月にグラナダで実施したセミナーの進め方である。テーマは「中級 (B1) の読解の教え方」、所要時間は3時間半、参加者は10名だった。

表5 対面研修の進め方の例

時間	段階	主な内容
5分	導入	出欠確認、内容紹介
10分	グループ活動①	読解授業を振り返る→全体共有
20分	講義①	1. 読解について (読解に関する基礎知識)
30分	グループ活動②	2. 試験で測る読解能力 (日本語能力試験 N3読解問題分析) →全体共有
20分	講義②	3. 読解能力を養成するための教え方 (読解の前作業・本作業・後作業)
15分	(休憩)	
30分	グループ活動③	読解教材分析 (『まるごと』中級の読解パート) →全体で共有
30分	グループ活動④	4. 読解授業案の作成 (1) (読解の本作業のタスクを考える) →全体共有
30分	グループ活動⑤	読解授業案の作成 (2) (生テキストのタスクを考える) →全体共有
10分	まとめ・質疑応答	全体のまとめ

表5の太字は、表2のオンライン研修と重なる内容である。グループ活動③はオンラインでは講義①に組み込み、参加者が教材を分析するのではなく、読解ストラテジーや読解活動の例として講師が紹介した。その他は基本的に同じように進めたが、前述のようにオンラインではグループ活動後の全体共有は行わなかった。

巡回セミナーは講師がマドリードから出張し、地域の日本語教師が年に一度一堂に会する機会でもあるので、十分な時間を確保し、講師とやりとりしながら様々な活動に取り組めるようにしている。一方今回のオンライン研修は、1回1テーマ、90分の設定だったので、同じテーマでもコンパクトに効率よく実施し、その中で可能な範囲でグループ活動を取り入れるようにしていた。担当講師としては、両研修で共通に取り上げた内容はほぼ同様に扱うことができたと考えている。オンラインでも試験問題や教材の分析、生テキストのタスクを考える活動が取り入れられれば、参加者の読解に対する理解はさらに深まり、実践にもより取り入れやすくなると思われるが、そのためには所要時間 (回数) を増やす必要があるだろう。

## 6.2 参加者の評価

巡回セミナーでもオンライン研修と同内容の事後アンケートを実施しているが、この研修でも参加者全員が「とてもよかった」と答えており、全体的な評価は高かった。オンライン研修と異なる点は、質問(3)の回答は内容に関する記述が中心で、他の教師との交流に触れたものはほとんどなかった。対面では交流が当然視されて、オンラインでは逆に新鮮に受け止められたのかもしれない。

前述のオンライン研修のフォローアップ・インタビューでは、対面とオンラインの研修の違いについても尋ねているが、全体として両者に学びの質の差はあまり感じられず、対面には対面の、オンラインにはオンラインの良さがあるという回答で一致していた。その他には以下のようなコメントがあった。

- ・対面は会場までわざわざ行って参加するということでモチベーションが上がるが、オンラインは地方在住者でも日常的に、無理なく参加できる。
- ・対面では周りの参加者と気軽に言葉を交わすことができるので、雰囲気が全然違う。
- ・オンラインの方がスライドが見やすく、内容に集中できる。
- ・オンラインのグループ活動は発言のタイミングが難しいが、それ以外は対面と同じようにワークができる。

これらのコメントからも、参加者は対面とオンラインの研修のそれぞれの特徴を理解したうえで、「自己研鑽」の場として活用していることがうかがえる。

## 6.3 担当講師の所感

今回のオンライン研修は、筆者にとっては初めての実践だった。そのため、これまで対面研修で取り上げてきた内容をオンライン研修向けに再構成することにしたが、それでうまく行くのか当初は不安があった。藤本(2019)は日本語初級レベルのオンライン授業を担当した教師の意識調査で、「通常の対面授業をオンライン授業で置き換えて行おうとしそれがうまくいかないことが多い」ことから、「『できないこと』に慣れ、できないことはあらかじめ回避するようになり、できる範囲で授業活動を遂行しようとする」ことを指摘している。筆者も同様の体験をしたが、その一方で対面研修以上の手応えを感じることも少なくなかった。

オンラインの場合、参加者全員の表情や反応を見ながら講義をすることが難しいため、今回は割り切って、講義の部分はスライドを提示しながら一方的に講師が話をすることにした。講義内容は対面研修で何回か実施したものであり、質問が出やすい点が事前に予測できたことと、最初のグループ活動の「盗み聞き」で参加者の問題意識を把握するようにしていたので、コミュニケーション不足はある程度補えると考えた。それでも最初のうちは一方的すぎるのではないかと不安になり、講義の区切りで質問やコメントを受け付けていたが、遠慮して誰も発言

をしない気まずい時間となるが多かったため、それも行わなくなった。その時間をグループ活動に当てることで参加者同士の交流が増え、その点が評価されたと考えている。

また、毎回の参加者の半数以上が繰り返しの参加者（リピーター）となり、講師とも、参加者同士でも物理的な距離を超えて親しい関係性を築くことができた。リピーターの多くは筆者が実施した対面研修の参加経験者だったが、オンライン研修では別の地域の参加者同士を繋げることができた。そして、これまで教師会や巡回セミナーに参加していなかった教師も、オンライン研修への参加をきっかけに他の教師と繋がる機会を持った。オンライン研修は、地域別の巡回セミナーや全国規模の研修会とは異なる「つながり」の場を提供することができる。

最後に、今回のオンライン研修ではJFが開発した教材を体系的に連続して取り上げることができた。巡回セミナー等の対面研修では散発的に取り上げざるを得なかったが、オンラインではこのような研修を継続的に実施することが可能であり、リピーターの存在からそのニーズがあることも確認できた。

今回のオンライン研修は対面研修の代替として実施したものだったが、オンライン研修には対面研修とは異なる効果と可能性が存在する。今回はオンラインの特性を十分に生かすことができなかつたので、それについては今後の課題としたい。

## 7. おわりに

本稿では筆者がJFMDで実施した同期型オンライン教師研修について報告した。先行事例と比べても非常に初歩的な試みであったが、対面研修の経験を生かした研修が実現できたと考えている。今回のオンライン研修は、もともと巡回セミナーの代替として実施を試みたものである。オンライン研修には、地方の教師が参加しやすい、回数やテーマを調整しやすい、出張等の経費がかからない等の実施面での利点があるが、研修の質の面でも一定の成果を上げることができたと言えるだろう。本研修終了後、新型コロナウイルスの影響でオンラインによる教育実践の必要性が急激に高まっており、今後はオンラインの特性を生かした教師研修の開発にさらに取り組んでいきたい。

### 〔注〕

- <sup>(1)</sup> 以上は引継ぎ報告書の記載による。なお、前任者は他に教師の研究能力開発を目的とした「オンライン実践研究ゼミ」も実施していたが、本稿ではそれには触れない。
- <sup>(2)</sup> 最終回は「教授法シリーズ (11) 日本事情・日本文化を教える」を予定していたが、残りの「(13) 教え方を改善する」と「(14) 教材開発」はオンライン研修で取り上げるのは難しいと判断して当初からはずしていた。また、パイロット研修 (4回、2テーマ) では、「日本語能力試験を例にしたテスト問題の考え方 (N3)」と「『まるごと』中級を例にした中級レベルの教え方」を取り上げた。

〔参考文献〕

- 岡本拓・杉島夏子 (2020) 「社会的コミュニケーションの場づくりを目指したオンライン会話会—インドネシアの高等学校における非母語話者日本語教師を対象として—」『国際交流基金日本語教育紀要』16、41-50
- 国際交流基金 (2015) 『日本語教授法シリーズ7 読むことを教える』、ひつじ書房
- 近藤裕美子、藤光由子、津田香織、井上美優 (2019) 「教師の継続的な学びを支える研修と学習コミュニティのデザイン—欧州日本語教育研修会の実践例—」『国際交流基金日本語教育紀要』15、67-78
- 鈴木裕子・近藤裕美子 (2017) 「学び続ける教師を支える日本語教師会の活動意義—スペイン日本語教師会会員への質問紙調査を通して—」『ヨーロッパ日本語教育』21、296-301
- 竹村徳倫 (2013) 「moodle を活用した初中等日本語教師への初級日本語研修と課題—インドにおける教師研修でのブレンディッドラーニングの試み—」『国際交流基金日本語教育紀要』9、121-133
- 竹村徳倫 (2014) 「インドにおける非母語話者教師向けオンライン日本語研修—遠隔地を対象としたブレンディッドラーニング—」『国際交流基金日本語教育紀要』10、39-54
- 藤本かおる (2019) 「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究—担当教師へのインタビューを中心に—」『日本 e-Learning 学会誌』19、27-41
- 村上吉文 (2013) 「ビデオ会議システムとライブ動画配信を利用した広域オンライン日本語教師研修の試み」『言語と交流』16、12-23